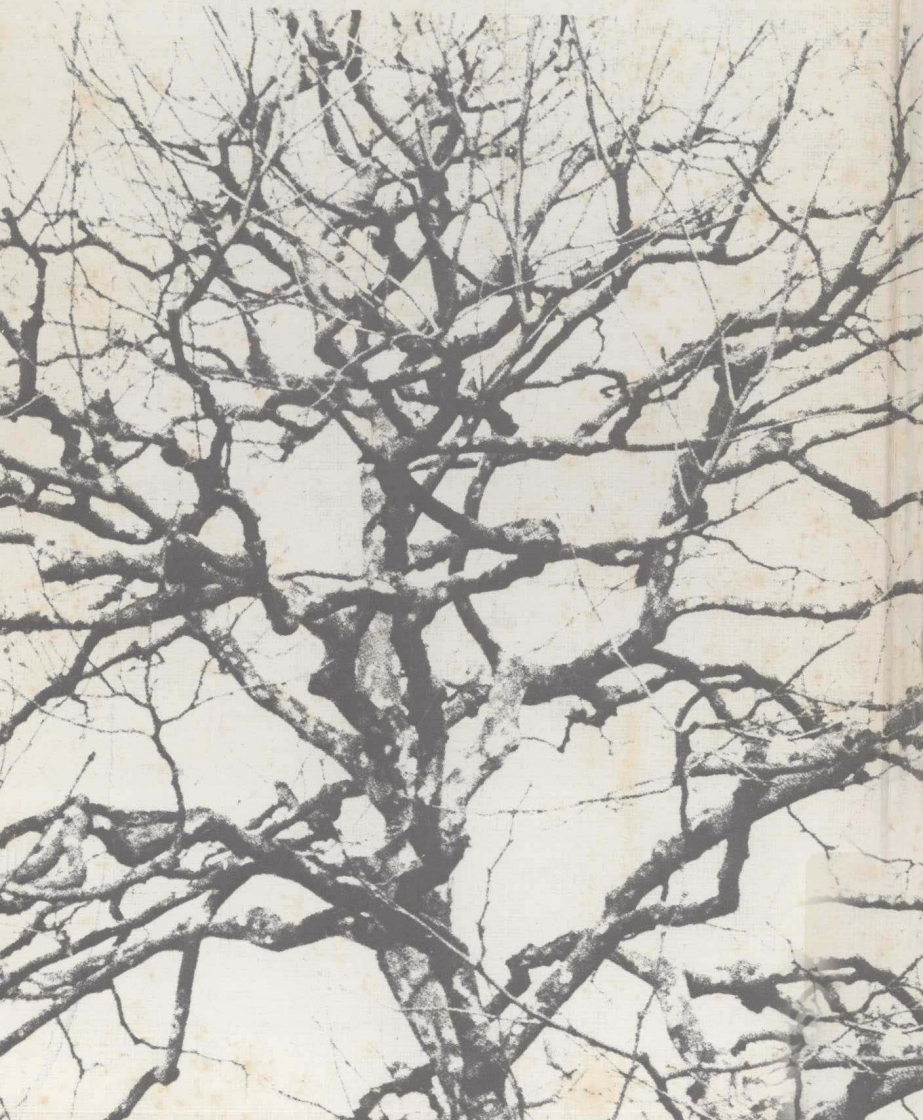


若きアイヌの魂

鳩沢佐美夫遺稿集

新人物往来社

若きアイヌの魂——鳩沢佐美夫遺稿集　©鳩沢美喜

昭和47年8月31日発行　定価 880 円

発行者 菅 貞人　発行所 新人物往来社

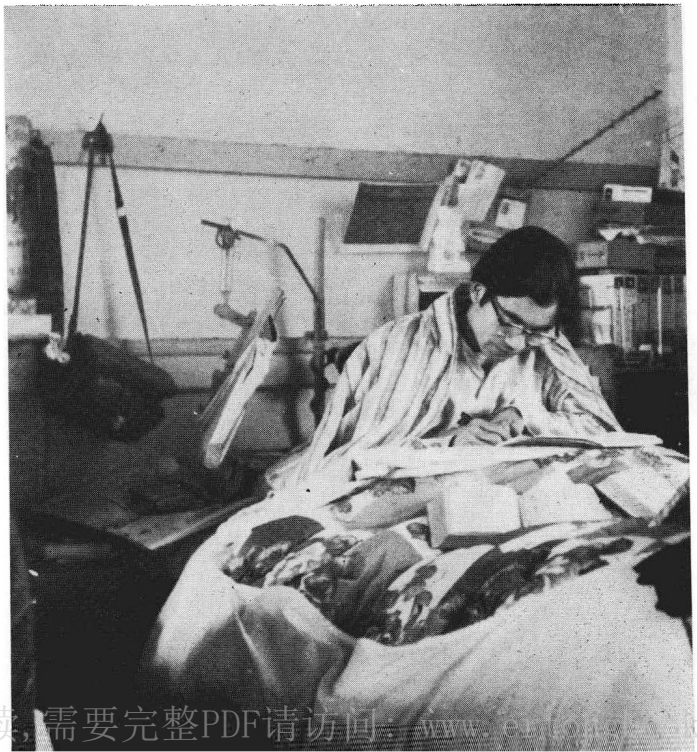
東京都千代田区丸の内3—3—1 新東京ビルヂング

〒100／振替口座 東京151643／電話（03）212—3931

印刷 ミイレー印刷株式会社／製本 美成社

書籍コード 0095—40060—3306

平取町義経公園にて（昭和37年11月）



右　平取町立病院にて（昭和37年11月）
右上　母に抱かれて（生後7カ月）
上　祖母とともに（昭和36年3月）

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

序にかえて

鳩沢佐美夫氏が、われわれの心に鮮明な記憶を灼きつけて、平取町去場の自宅で死去されてから、早一年近い月日が過ぎようとしている。

彼は人生の大半を町立平取病院で過ごしているが、幾度もペンを持つことさえゆるされないほど症状が悪化し、死線をさ迷っている。

そういう彼を知っていた私たちであったが、不思議と、彼の弱さの一面よりも、文学を志向していた活動力と、強固な意志によって支えられた情熱に引きつけられていたのだった。常にすぐれない健康にありながら、歯をくいしばって最後の日まで自己の信念を生きた彼の生涯はすべて、文学からのアプローチであったといえよう。

彼は日高文学時代以来、アイヌのかげにおびえるアイヌ人の心を文学の魂として追究し、それを解くまでは死ねないと決意していた。小説においても痛烈なアイロニーをもって、抑圧する側に立つ人間の人間性を問うた。しかし、それはあくまでも、心に深い傷を受けた者の怒りの挑戦でなくしてなんであったろうか。

彼は、アイヌとしての心のよりどころを求めて止まなかった。それを証明してくれる人

たちが身近なところにいて、彼にユーカラやヤイサマなどを情感こめて謡ってくれた。このように彼はアイヌの伝統文化へ回帰することによって、自己認識を確認していったのであろうと思う。

今日、すべてのアイヌの人たちは日本人として和人と全く変らない生活をしており、風俗、習慣の違いは何処をさがしてもないのである。観光化による矛盾はある。しかし、なかには民族の伝統文化を正しく継承しようと努力を続けている人たちもいる。この大自然からロマンチシズムがなくならない限り、アイヌ民族の生きた足跡は消えることがないであろう。

鳩沢佐美夫氏の深い輝きに澄んだあのまなざしを想い出すとき、私たちには今も彼の、人間と自然と祖先から伝えられた神々への愛、生きとし生けるものの生命を重んじた精神が見える。われわれが、この遺稿出版を企画したのも、ひとえに死を賭して差別と闘ったこの精神を一人でも多くの人たちに理解してもらいたい、と思ったからである。

最後にこの〝鳩沢佐美夫遺稿集〟出版に寄せられた新人物往来社のご好意、とくに編集局出版部の内川千裕氏の親身のお世話に対して厚く感謝する。また、この出版のために道を開いてくださった藤本英夫氏、北海プリント社の赤木三兵氏および、鳩沢佐美夫作品集出版委員会にたいして道内各地から芳志をお寄せくださった方々に対して深甚なる謝意

を表す。遺稿の整理にあたり貴重な時間をさいてくださった須貝光夫、平村芳美、柚原君子の諸氏にそれぞれ深く謝意を表したいと思う。なお、表記については完全なる誤りと思われるもの以外は、原則として原文のままである。

昭和四十七年七月

鳩沢佐美夫作品集出版委員会

代表　貝沢　正

同　橘　武士

事務局　盛　義昭

目次

序にかえて　1

対談　9

序章　風聞　告発其一　告発其二

告発其三　錯線　提言　終章

評論　73

アイヌ人の抵抗

「アイヌ人の抵抗」反省記

最近アイヌ考

日記　91

一九六七年一月——四月

書簡 143
須貝光夫宛
石井京子（旧姓島野）宛
上原智子宛
岩田英夫宛
解説・抵抗の論理　須貝光夫 228
鳩沢佐美夫略年譜 246

装幀　秋山法子

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

若きアイヌの魂

——鳩沢佐美夫遺稿集

対

談

アイヌ

☆ 鳩沢佐美夫（三十五歳）
★ おんな（二十三歳）

序章

☆ とうとう二人だけになっちゃったな。
★ う……？
☆ つまりさ、それぞれに時期的に忙しいという事情もあるのだろうが、やっぱりこういった課題に挑むにあたってはね、なんかこう出て来たくない、という理由のほうが強いんじゃないかな。〇〇子（会員・二十六歳）にあんた電話をかけておくったろう。だから行ったらね、僕の顔を見るなり、もう盛んなデモンストレーションさ。「いまさら、アイヌだとかシャモ（和人）だとか問題にするのはおかしい」ってね——。だから企画内容について、いろいろ話はしたんだ……。けどね、話をしているうち考えちゃったんだ。変に説得をしてまで、ここに引っぱり出しちゃいけないってね——。つまり、われわれがここでこだわりを持つような形で話し合っちゃならないんだ。この企画はもう一年も前から予告してあるだろう。それと、僕もいちおうアイヌ系会員四名には前もって協力は要請してあるしね——。ま、そういったなかで、結局今夜は二人だけになっちまった、ということさ——。で、どうする？　あんたも、やっぱりこの対談は匿名を希望するかい——。
★ どうしようかな……。
☆ うん、じゃあ、この対談の終わりで、もう一度同じ問いかけをするから、そのときに答えてよ。
★ いやあ、こういうことだとおもうんだわな……。私はね、名前を出されたってかまわないけどさ、これからのね、文芸活動の面でマイナスになったら困るな、とチラッと考えたのよ。そういうなんちゅうかな、一般生活している面ではね、かまわないけどもさ、ただそういう面でさ……。

☆　というのは、色眼鏡で見られたくないってこと？

★　うん、それもあるし、そういう印象をまず与えたくないってことよ。これからもずーっと書きたいからね。そういう面で、多分いまは取り組めなくっても、いつかはこういった課題とも取り組むことになると思うの。そのときにさ、不利になるような状態にはしたくないということ……。

☆うん……。いいだろう。ただ覆面っていうか、ならね、何をしても何を言ってもいいんだ、と思われたくないからね、僕は実名でいくよ――。で、そこでね、去年（昭和四十四年）の暮、ある新聞社がわれわれの『日高文芸』を取材に来たことがあったよな。あのとき「『日高文芸』は、農業問題も取り上げるし、婦人問題も取り上げる。また、アイヌ問題も取り上げるという――。非常に積極性があっていいが、われわれマスコミ仲間ではアイヌ問題はタブーなんだ。『日高文芸』は、アイヌ問題をどう取り上げるんだ」と、質問されたよな。あのときあんた、どう思った？

★　なんか、回りの人たちが話題をはずしたような感じだったね。

☆　え？　いや、その……あのときの七、八名の会員でさ、アイヌといえば僕とあんただけだからな。何かショックを受けたんではないかと思ったんだ。

★　うん、なんでそうタブーなんかなと思って……。

☆　それよりも、アイヌ問題というものがさ、そこに登場して来たんで、あんた自身、何かこう意識っていうかな、うつむいてたんで、頑ななものに捉えられたんでないか、と僕は思ったんだ。

★　ううん、そんなこと別になかったね。

☆　そう、それならいいんだ。僕はあのときね、マスコミ的な視点でこれを取り上げるんじゃない、あくまでも会員内部から問題点を提示してもらうんだ、と言いたかったんだ。だけど、あの場の雰囲気としてはそれを言っちゃならないような気がしてね。新聞社の狙いどころはそこらあたりであったろうし、何もわれわれ〈日高文芸協会〉の活動はアイヌ問題ばかりが課題じゃないからな。しかも四十数名の会員のうちアイヌ系というのは数人だろう。とにかくだ、この地域では双方ともにアイヌ問題の問題という言葉がタブーなんだ。第三号誌――

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com